

中国雲南省摩梭（モソ）人の婚姻変化と移動

金縄, 初美
西南学院大学国際文化学部

<https://doi.org/10.15017/2344800>

出版情報：九州人類学会報. 42, pp.74-93, 2015-06-05. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

中国雲南省摩梭（モソ）人の婚姻変化と移動

金縄 初美¹（西南学院大学国際文化学部）

I 本発表の主旨と目的

本稿は2014年度九州人類学研究会オースタムセミナーでの発表をもとにした研究報告である。報告の目的は「中国少数民族の移動と共生」というセッションテーマに基づき、中国雲南省の少数民族である摩梭（モソ）人の社会と婚姻の変化を事例として取り上げ、婚姻と移動の関係、及び移動に伴ってみられるアイデンティティの揺らぎを分析することによって、「移動」と「共生」の実態を考察することである。以下、摩梭人居住地における現地調査で収集した事例を挙げて論をすすめる²。

摩梭人は長期にわたって母系家族を基盤とした社会構造を持ち、「走婚」と呼ばれる妻問い婚を行ってきた。1950年代に実施された農業集団化、1966年から約10年間続いた文化大革命など、社会形態を大きく変える国家政策の影響を受け、家族婚姻形態にも変化が見られたが、1989年から進められた摩梭人居住地での観光開発を契機に人の移動が急激に増加し、彼等の家族婚姻形態はさらに大きく変化した。摩梭人の家族婚姻形態は母系を基本としながらも、環境に合わせて柔軟に変化を見せる側面があったため、従来より母系、父系、母系父系併存の3形態が存在してきたが、それは一定の地域内に限定された環境の中で対応するものであった。しかし観光化による人の移動は一定の地域を超えたものであり、摩梭人は意識的あるいは無意識的に家族婚姻に対する態度をダイナミックに変えている。

摩梭人社会に関する研究は当初、家族婚姻及び民間宗教「ダバ教」に偏っており、その家族婚姻形態を原始的な段階として考察するものが多かった³。2000年になると、摩梭人

¹ E-mail アドレス : kanenawa@seinan-gu.ac.jp

² 現地調査は雲南省寧ロロ自治県永寧郷落水村（地図B①）、同郷瓦拉片（ワラビ）村（地図B②）を中心に、1997年から2013年までして断続的に行ってきたが、四川省小落水村（地図④）、四川省瀘沽湖鎮落洼村（地図⑤）、四川省木里県屋脚郷（地図⑥）でも2000年8月と2004年8月に実施した。

³ 『雲南省寧蒗彝族自治州永寧納西族社会及母権制的調査報告（寧蒗県納西族調査材料之一、二）』〔中国科学院民族研究所雲南民族調査組雲南省民族研究所1963〕、『雲南省寧蒗彝族自治州永寧納西族社会及母権制的調査報告（寧蒗県納西族調査材料之三）』〔中国科学院民族研究所雲南民族調査組雲南省民族研究所1964〕、『寧蒗彝族自治州永寧納西族社会及家庭形態調査（寧蒗県納西族家庭婚姻調査之一）』〔雲南省編輯組1986〕、『寧蒗彝族自治州永寧納西族社会及其母系制調査（寧蒗県納西族家庭婚姻調査之二）』〔雲南

社会に対して再検討が行われ、家族形態は母系から父系へ発展するという固定観念からの脱却を提示し、婚姻は生きるための選択であるという観点からジェンダー論に視点をおいた研究[和:2000]や、社会変化の側面に着目した研究もおこなわれるようになった[周:2001]。また2000年代半ばからは摩梭人出身の知識人による従来の研究に対する再考や批評も出されるようになり[拉木・古薩 2009; 楊建国 2009; 楊麗芳 2009]、これまでは描かれる対象であった人々からの発信に注目が集められている。

先行研究の大まかな流れをみると、組織的に実地調査がすすめられた1960年代に大量の調査資料が収集されたが、調査分析結果は固定的であり、漢族の立場から原始的な社会を研究するといった姿勢が多くみられた。その後の社会変化を経て、漢族研究者あるいは国外の研究者による社会進化論に捉われない研究が出てきた。さらに自文化への意識が現地で高まったことにより、自民族出身による自文化に対する再検討が行われるようになった。特に近年出版された摩梭の知識人によって出版された著書は、人口移動による過疎化に対する危機感や母系社会や走婚に対する好意的見解が記されている。しかし一方では、現実社会の中で多くの若者は故郷を離れ、経済的豊かさを求めた選択を優先し、母系社会や走婚は意識的に守らなければならない遺産、あるいは観光客に見せるための文化になっている。

本稿では、これまでの研究では欠けていた「意識の差」に着目し、意識的に選択される婚姻と無意識に選択されている婚姻の違いをもとにアイデンティティの差異を捉え、その中から「共生」の実態を把握することを試みる。

II 摩梭人の居住地と概要

摩梭人居住地区は主に雲南省寧蒗彝族永寧郷、四川省塩源县である。本地区には、彝(イ)族、普米(プミ)族、納西(ナシ)族、白(ペー)族、藏(チベット)族、傈僳(リス)族、漢族なども居住している。摩梭人が集中して居住しているのは、雲南省と四川省の境界に位置する「瀘沽湖」という高原湖周辺である。人口は約4万人で、日常的に摩梭語を使用するが、摩梭語が通じない人との会話は一般的に「普通語(標準語)」で行われる。チベット仏教とダバ教を信仰しており、各家にチベット仏教を祀る仏間が設けられている。

省編輯組1986]など1960年から1968年に実施された調査をもとにした報告書、『永寧納西族的母系制』[宋兆麟・巖汝嫻1983雲南人民出版社]などが挙げられる。

ダバ教の信仰内容は主に祖先崇拜、自然崇拜、病気治癒、家内安全などである。民族的ルーツは、漢籍文献⁴とダバ教の「指路経」による検証から、摩梭人の祖先は古代氐羌人で、中国西北地方から四川省を経て南下し、雲南省に至った後に定住したと考えられている。生業は観光業と農業、牧畜が主体である。農業は水稻、ジャガイモ、ソバ、トウモロコシ、豆類を中心に栽培し、牧畜はヤギ、ブタ、トリなどを主に飼育している⁵。1989年以降開始された観光業については後に詳述する。

III 摩梭人の家族婚姻形態

本報告の中心議論である摩梭人の婚姻変化を述べる前に、婚姻形態の土台となる家族形態の特徴を整理する。摩梭人の家族形態には母系、父系、母系父系並存の3タイプが存在し、うち母系家族と母系父系並存家族の割合が高い⁶。

摩梭人の母系家族の特徴は以下5点にまとめられる。1) 女性が財産を継承する。2) 家長は女性が担当する。3) 男は妻を娶らず、女は嫁がない。4) 配偶者と同居しない母系血縁集団である。5) 共通の祖先を祭ることである。

父系家族は男女が独立して生計をたてるか、数世代にわたり父系を繰り返すことによって成立する。したがって母系家族が基盤となってきた摩梭人社会では父系家族が非常に少ない。

母系父系並存家族は、母系家族中の数人、あるいはある世代が婚姻するか、夫婦及び子どもと同居することによって母系と父系が一家族の中に並存する形態をもつ。

次に摩梭人の婚姻形態を整理すると、走婚、夫方居住、妻方居住、一夫一妻独立型の4タイプを挙げるができる。1996年に11の村において18歳以上の952名を対象に行われた調査によると、走婚を行なっている人は356人で、全体の37.39%を占め、夫方居住を行っている人は302人、全体の31.72%を占めている。うち未婚者は294人で、全体の30.88%占めるという結果が出ている〔和鐘華 2000 : 45〕。

各婚姻の特徴は次の通りである。まず、走婚は摩梭語で「sese」呼ばれる妻問い形式の婚

⁴ 主に『後漢書』西羌伝、『西康図経志』、『蛮書』などの記載を根拠としている。

⁵ 『寧蒗彝族自治州志』1993年、寧蒗彝族自治州志編纂委員会、雲南民族出版会 p177 参照。

⁶ 家族婚姻の分類と特徴については、『永寧納西族母系制』宋兆麟・嚴汝嫻著、1983年、雲南人民出版社 pp268-292、pp360-371を参照した。

姻である。「sese」とは摩梭語で「歩く婚姻」という意味であることから、中国語で「走婚」という呼称が用いられるようになり、一般的にも学術的にも使われるようになった。その特徴は、1) 男性が夜女性の家を訪ねる。2) 男女ともに昼は母親の家で労働をする。3) 男女の感情を基礎にしている。4) 子どもは父と同居せず、母方の家で養育される。5) 男性は実子に対しての養育義務はないが、母方オジとして姉妹の子の養育責任を持つ。6) 感情がなくなると別れる（基本的に手続きは必要なく、できるだけ争いにならないよう心がけることが望ましいとされる）ことである。走婚は摩梭人同士、あるいは普米族や漢族といった近隣の民族との間で行われてきた。

夫方居住は、婚姻関係を結んだ男女が夫方に居住する形態であり、走婚をする男女の間では、夫方に女性家族が少ない場合にこの婚姻形態がとられることが多い。妻方居住は婚姻関係を結んだ男女が妻方に居住する形態であり、走婚する男女の間では妻方に男性家族が少ない場合に行われる。一夫一妻独立型は一夫一妻の独立した家庭をもち、夫婦で子どもを養育する形態である。

IV 摩梭人の社会変化と移動

当地区ではかつて農業集団化や文化大革命などの社会改革や思想闘争を経験したが、1989年より始まった観光開発は今日の社会と婚姻に大きな変化をもたらした。その変化の過程を明らかにするため、以下約25年間にわたる観光開発の経緯を5段階に分けて記述する。

第一段階（1989年～1996年）を萌芽期として区分し、当時永寧郷落水村出身の旅行局副局長の自宅において民宿経営が始まった1989年を起点とする。当初村人は観光業を始めることに反対だったが、その後落水村で急速に観光化が進展した。当初は観光客の受け入れ態勢が不十分だったため、村内での争いごとが頻発した。そこで当時の村長は10人からなる村民委員会を設立し、観光業に関する価格を明確にし、観光業で得た収入は「家」単位で平等に分配されるよう規定を作った。観光開発が始まった初期段階では、観光客を受け入れることが中心であり、摩梭人が外に移動することはほとんどなかった。

第二段階（1997年～1999年）は発展期として区分した。この時期は、前段階で定められた村規約を実行、調節し、観光業に組織的発展が見られた。前段階で定められた、家単位で平等に収入を分配する規定は、大家族の分家を促した。これまでは大家族で農業をする

ことが農作物収穫量の増大につながると考えられていたが、観光収入が各家に分配されることによって、小規模家族の方がより利益を得やすくなったためである。観光開発が始まる前は13戸であった家が73戸まで増加した時点で、村委員会は急速に分家がすすむことを心配し、分家を禁じる規則を定めた。1997年の時点では民宿を経営する家は2戸のみであり、当時はまだ観光客も少なく、観光客が来ると10代後半の若者が中心となって、客を馬に乗せて山手のほうに案内したり、丸木舟に乗せて湖遊覧をしたりし、落水村では毎晩民族舞踊会が開かれるようになった。

若者が観光業に従事したことによって、若者を中心に外部と接触する機会がうまれた。外部から商売に訪れていた漢族男性が婿入りする事例も見られるようになったが、まだ少数であり、漢族の婿入りに対して排他的態度がとられるケースがみられた。1999年には観光業の利益をめぐる落水村の摩梭人と漢族が衝突し、それを受けて1992年から村の観光整備に尽力してきた村長が辞任した。1999年夏に筆者が落水村で実施した聞き取り調査によると、落水村では外に出る若者が増えたが、移動先は1)麗江でガイド、サービス業などをする。2)1999年に昆明で開催された「世界園芸博覧会」と都市部の民族村に摩梭人村が開設されたことにより、歌舞団のメンバーとして昆明、北京、深圳などに集団で働きに出るというタイプに分けられる。しかし、この時期に外に出た者は、一定の期間を経た後、村に戻って走婚をするケースが多かった。

第三段階（2000年～2004年）は変換期として区分し、観光業が発展後の転換をむかえた時期である。「女兒国」という名称での観光宣伝により、母系社会で走婚をしている摩梭人を見ることを名目にしたツアーが激増したが、多くの摩梭人は自分自身が見られる存在になっていることに抵抗を感じていた。2003年には「雲南省麗江市寧蒗県瀘沽湖下村摩梭民俗博物館」が設立されたが、これは1990年代後半から落水村が大きく変化し、母系社会や走婚ばかりに人々の注目が集まることを意識した2人の摩梭人青年が、ダバ教などを含めた摩梭文化を全面的に理解してもらおうと建設した博物館である。2004年8月の訪問時には、新たに落水上村の普米族が下村の畑に民宿を建て、落水村の耕地が大幅に減少していた。この頃、ある摩梭人女性が走婚相手の漢族男性から投資をうけ、自宅を各部屋シャワー・水洗トイレ付きの大型民宿に改築した。設備が整った民宿は、以前のシャワーなし・野外の共同トイレ使用の民宿より人気であったため、多くの民宿は借金をして改築した。この頃から外部の男性の協力を受けて経営手段を練る家が増え、民宿の宿泊価格も値上がりし始めた。さらにこの開発によって、処理されない汚水が湖に流れるなど環境汚染が目

立つようになり、2004年には中国中央電視台で環境汚染と風紀の乱れが取り上げられ、問題の所在が全国に知られることとなった。この時期、外部との接触が一段と盛んになり、摩梭人女性と外部の男性との走婚や、観光客女性と摩梭人男性との婚姻もみられるようになった。第二段階では、外に出た若者は一定の期間が過ぎると村に戻って走婚をするケースが多かったが、第三段階になると、観光業が最も盛んな落水村では、1999年から麗江地区の十大富裕村に指定されるほど経済的に豊かになっていたため、2000年以降は昆明などの大学に進学する者が徐々に増えた。進学によって外に出たものは公務員や会社員になるケースが多く、麗江や昆明に居住した。

落水村の発展は落水村以外の村々にも影響を及ぼした。永寧郷内の村や瀘沽湖の対面位置する四川省の鎮や村から落水村に出稼ぎに来る者が増えた。落水村で必要とされた仕事は主に民宿の手伝いだったため、落水村に来るのは女性が中心であり、彼女たちは落水村で外部の人々と接する機会を得た。男性は村に残るか、炭鉱などでの短期の出稼ぎに行くものが多く、男女間に意識の差が出てきた。

第四段階（2005年～2009年）は前段階で指摘をうけた環境問題に対する調整期として区分した。環境問題と瀘沽湖観光の整備に取り組んでいる第三セクターの「麗江瀘沽湖省級旅行区管理委員会」への調査によると、2004年の報道をきっかけに、2005年から総額9,185万元（約114,800万円）が投資され、麗江瀘沽湖省級旅行区管理委員会を中心に環境保護とインフラの整備、風紀の取り締まりが強化された。その結果、2009年の報告では、保護活動は一定の成果を得たとされている。

民間の活動においては、2006年1月に「麗江市瀘沽湖摩梭文化研究会」が発足し、文化保護活動を積極的に展開するようになった。本会は博物館創立者、研究者、摩梭文化保護を支持するメンバーで構成され、本拠地は落水村に置かれているが、活動内容は主にインターネットのホームページで紹介する形をとっている。本会では学者や文化保護に興味をもつ青年がセミナーを実施し、ダバ教の内容や儀式を学ぶ機会を設けている。ホームページにもダバ教のことが多く記載されており、ダバ教の保存と現状を記録したメディア作りに力を入れていることが窺える。

この時期に行われた環境面、文化面の取り組みは摩梭人を中心としたものであったが、活動が広がるにつれ外部の力を借りる必要が出てきた。この環境整備において、道路などのインフラ整備とともに不動産開発も計画された。ここで展開されている不動産開発は、外部の商人や企業が土地を一定期間借用するというものであり、その後の土地の利用につい

では借用者に委ねるというものである。この動きは急速に広がった。それは設備の整った民宿を建てるために多くの人々が借金をしていたこと、労働を担う若者は外で働くことを望んで村を出たため、40代以上の女性に家事と民宿経営の負担が偏っていたためである。この頃から若者は外に出たまま村に戻らなくなり、本地区出身の人口と外部人口の逆転現象が起こり始めた。また、外部の男性と比較的安定した走婚関係を築いて子どもを出産した女性は、子供たちに幼稚園から教育環境が整った都市部で教育を受けさせることを望み、走婚相手と子供とともに都市部へ移住した。麗江ではこのような女性を中心とした同郷者で集まる会も頻繁に開催されている。

女性の移動が活発化したことにより、温泉村では2005年に「摩梭伝統手工紡績場」が設立された。本組織は温泉村に活動拠点を置き、雲南省文化庁、雲南省民族委員会、麗江民族委員会、麗江市婦人連合会、摩梭文化研究会所属の学識者などの支持を得て創立されたものである。温泉村の女性が中心となり、農作業の空き時間などを利用して摩梭人の伝統織物を作成し、麗江市で販売する。売上金は織物の作成数に応じて分配するというシステムである。この活動によって得られた収入は子供の教育や家族の薬代などに充てられている。よって、この時期から温泉村でも従来の出稼ぎに加え、麗江市の高校や昆明の大学などに進学する者が増えた。

最後に、第五段階（2009年～現在）を外部依存期として区分した。不動産開発を核とした外部企業への土地の賃貸が始まり、これまで摩梭人の自宅を改造して建てられた民宿を中心としてすすめられてきた観光開発が大きく転換することになった。2013年3月に成都で開かれた麗江市瀘沽湖摩梭文化研究会主催のセミナーでの雲南省社会科学院民族文学研究所副所長の拉木・嘎吐薩の報告によると、落水村の摩梭人人口は672人、土地を借用している外部の商人は2000人という⁷。四合院形式の家で一年2、3万元、期間は20年という契約が多いという。これは長期的にみると摩梭人にとって不利な契約であると考えられると指摘されている。2005年の以降のインフラ整備と観光開発の拡大により、瀘沽湖周辺全体に観光地が広がった。開発が早かった落水村は1989年から村の自治を中心に開発がはじめられたが、開発が進むうちに外部の指導が加わることになり、開発が遅かった村では初めから外部の介入によって開発が進められ、外部の企業や商人による土地借用が進めら

⁷ www.mosuo.org.cn（麗江市瀘沽湖摩梭文化研究会ホームページ）、「瀘沽湖区域納文化論壇（実録）」参照（2014/10/10）

れた。土地の借用が進むことにより、観光業は外部任せとなり、農地も減少したため現地での仕事は激減し、若者は仕事を求めて外に移動した。

V 摩梭人の婚姻にみられる変化

観光を転機とする社会と移動の変遷によって、摩梭人の家族婚姻形態も変化した。以下、上述した社会変遷の5段階と照らし合わせて家族婚姻の変遷過程を考察する。

落水村で観光開発が始まったばかりの1989年から1996年（第一段階）は、大家族で農業中心の生計をたてながら民宿を経営し、客を受け入れるのみで、外に出ていくものはほとんどいなかった。文化大革命期に走婚は禁じられ、夫婦同居が強いられたが、その下の世代である1950年代後半から70年代生まれの者たちの間では走婚をする者が再び増加した。1999年の調査時には、同地区内の摩梭人同士か摩梭人と普米族の間での走婚が主であった（参考事例②、③参照）。

1997年以降になると、移動先は主に2つあり、1つは麗江で、もう1つは昆明、北京、深圳などの民族村である。この時期は出稼ぎに出るものは非常に少なく、特に女性が出稼ぎに出ることに家族は反対した。家族の反対を押し切って麗江に出稼ぎに出た若者の多くは都会での生活になじめず、家に帰ってきて同地区内の者と走婚をした（事例④参照）。民族村に行く者も、10代後半で出ていき、20歳過ぎには家に戻って走婚をした。民族村への移動は、民族村の職員が摩梭人の若者を集団で民族村に連れて行ったため、そのグループ内で恋愛する者もいた。そういった男女も家に戻って走婚するケースが多かった。

1990年代後半には、外部から婿入りする漢族男性が数人いた。漢族男性の婿入りは、男性の外部とのつながりや商才が民宿経営に役立つとされ、歓迎される面もあったが、男性が母系家族のメンバーと意見が合わない場合には排他的態度をとられることがあり、ある漢族男性は家族との不和によって数か月間家を出たこともあった。

2000年になると、観光化が進んだ村では外部から走婚あるいは婿入りする漢族男性がさらに増えた（事例①参照）。2000年から2004年の間に落水村と温泉村で行ったインタビューでは、多くの摩梭人女性が「外部の男性との走婚をしたい」と答えた。「観光業の発展の中で外部の男性の勤勉さや経済力は魅力だが、婿入りをして家庭内で同居するのは難しく、喧嘩が絶えなくなるので、走婚の形態が好ましい」と語る女性もいた。観光業が発展していない温泉村で2000年に調査を行った時には、数人が外に出稼ぎに行く以外、ほとんどの

者が同地区の摩梭人か普米族と走婚をしていた。その後落水村の観光業が発展すると、温泉村から落水村の民宿などに働きに出る者が増加した。落水村での仕事は民宿での掃除、食事作りだったため、外に出るのは概ね女性であった。落水村では外部の男性と接する機会が多かったが、そこで知り合った男性と走婚をすることは少なく、温泉村と落水村の間の移動を繰り返す者が多かった。

経済的に豊かになった落水村では、昆明などの大学や短期大学に進学する者が増えた。その当時大学に通い始めた者は1980年代生まれで、大学に進学した者の多くはそのまま都市部に留まって仕事をした。

2004年以降には、1980年代生まれの者たちが結婚年齢を迎えた。この時期の婚姻形態は多様化している。観光化が進んだ落水村と観光化されていない村の間には大きな経済格差が生まれたため、婚姻の状況にも違いが見られる。まず落水村では以下3つのケースが増加した。1つ目には外部の漢族男性が婿入りする、2つ目には走婚をした男性との間に産まれた子供の教育のために都市部に移動する、3つ目には進学をした者はそのまま都市部で就職し、他民族と婚姻するというケースである。温泉村では、出稼ぎ先、あるいは進学先で他民族とする者が増えたが、男女ともに商機を求めて移動し続ける者が多いのが特徴である。外地で移動し続ける者が増えた場合でも兄妹のうち誰かが家に残るように調整されている。男性が走婚をする場合、女性と共に移動を続けるため、実家に滞在する時間は比較的短い。女性のほうが家の事情を優先することが多く、これは家庭の切り盛りは女性が行うという母系家族の観念が継続していると考えられる。

2009年以降、落水村や瀘沽湖湖畔の村では土地の借用が進み、観光業は外部任せとなり農地は減少したため、仕事を求めて外部に移動する者が更に増えた。観光業で豊かになった者が麗江で住居を購入し、夫婦同居で子どもを養育するケースがよく見られる。温泉村では、移動を繰り返す若者たちが外部で他民族と結婚するケースが多く、仕事の都合により常に居住を変えることが多い。女性の場合、走婚相手と共に行動するのは、実家であろうと外地であろうと、自分のいるところに走婚の相手が来るという形になるので、移動型の走婚という形式になっている。本来の走婚は女性の家に男性が通うものであるが、今日の走婚の概念は「同居しない婚姻」となっているようにも考えられる。移動を繰り返す場合、一定の期間実家に滞在することもあるため、人口流出に対する意識が薄い。

子どもが生まれ、就学年齢になると常に移動を共にするのは難しくなるため、実家の両親に預けるといったケースが多い。これは中国全体に見られる状況である。現在、1980年代

以降生まれの世代の親は走婚をして実家で暮らしているため、母系家族の枠組みの中で子供たちは育てられている。若者たちに母系家族の行く末を尋ねると、ほとんどの者が「今外で仕事をしているが、年を取ったら家に帰って母系家族を引き継ぎたい。もし自分は戻ることが出来なくても兄妹の誰かが戻るであろう」と言う。しかし、今後この子どもたちが成長した時に親の世代の居住地はどこにあるかということによって、母系家庭の行く末が大きく変わるであろうと考えられ、その行く末はとても不安定である。

2013年7月に温泉村で初めて結婚式が執り行われた。現地の摩梭人男性が昆明の大学に進学中に台湾の女性と知り合い、彼女と結婚することになったからである。同村での結婚式は初めて行われるもので、その他の儀礼に習い、チベット仏教のラマ僧とダバに読経してもらおうようお願いした。村の親戚友人、台湾から参加した新婦の親戚友人、昆明の友人など700人にのぼる客人に酒と料理がふるまわれ、夜は民族舞踊と地元の歌手によるコンサートが行われるという盛大なものであった。結婚式に来ていた未婚の女性と話をしていると、その女性はこのような結婚式にあこがれると言っていた。この結婚式をきっかけに、温泉村の若者の結婚に対する考えは変わる可能性があるだろう。

VI まとめ

以上、落水村での観光開発の経緯を5段階に分け、その変遷にともなう婚姻の変化と移動の様相をみてきた。

落水村では1997年以降、観光業が飛躍的に発展した頃から、外部に出ていく者が増え、漢族男性の婿入りの事例が見られ始めた。当初は外部に出ていく者も一年前後で村に戻って走婚をしていたが、2000年以降になると、進学した者が外地で就職することになり、この場合は村に戻らず他民族と結婚し、家を離れることになった。漢族男性と走婚をしていた女性は子どもの教育のために麗江に暮らすようになった。幼児期から外地で暮らす子供たちはこの先都市部で進学するであろうと思われるが、継続調査が必要である。

一方温泉村では現在でも観光業は発達しておらず、先に開発がすすんだ落水村での出稼ぎを通じて外部と接触する機会が増え、その後は麗江、昆明そして中国全域へと出稼ぎに出る者が増えた。しかし、現在のところ、その移動は流動的であり、定住という形をとっていない。それゆえ、事例⑤に見られるように、常に移動をする若者たちは長期

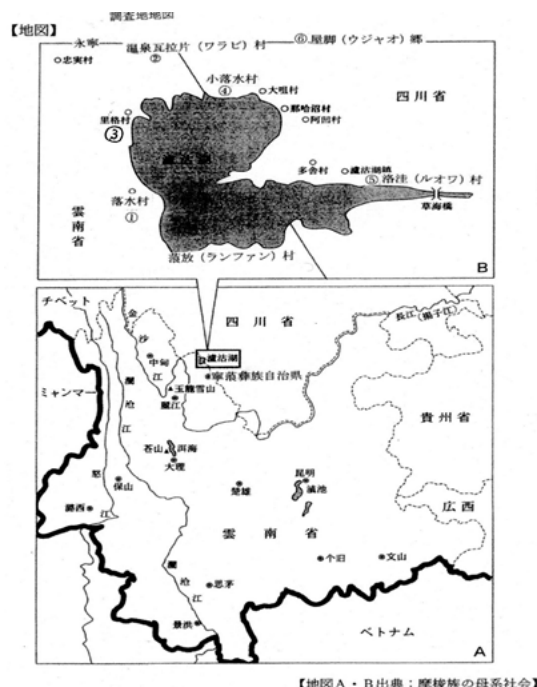
にわたって家を離れていても家族の一員と認識されている。2000年代後半になって、徐々に経済面が向上してきたこの村では、大学へ進学する者も出始めたばかりである。落水村の大学卒業者のようにそのまま外地で就職するのか、地元に戻るのかは今後の観察が必要である。

これらの移動により、落水村、温泉村いずれにおいても、1980年代以降に産まれた若者の不在が顕著である。しかし、摩梭人の家族婚姻への考え方の根底には、家庭の継承を重んじる思考と行動が存在している。観光化が進んでいる落水村では、民族意識の継承という意味で、若者の流出を意識的に捉え、問題視している。だが実際には、経済状況に対応して土地の借用が進んでおり、若者の流出を促す形になっているのであり、家族の継承と若者の流出という現象の間に矛盾が生じている。温泉村でも若者の不在が顕著でありながらも、若者の移動は流動的であるため、家族の継承の問題がまださほど意識されていない。しかし、ほとんどの若者は現地に残って走婚をしておらず、今後村の経済状態が向上しない限り、村に戻って定住することはないと思われる。

両村の状況を比較すると、家族の継承というこれまで重んじられてきた考えに対する意識の差が明らかになった。つまり、落水村では外地での定住が進むにつれ、家族継承問題をしっかりと意識し、一部の学識者は文化保護という形でこの問題を提唱している。外地特に麗江では同郷意識も強く見られ、同郷会が定期的にかかれている。温泉村では外地との間での移動が繰り返されており、家族継承問題に対する意識ははっきりと見えてこない。常に不在の家族も無意識に家族の一員として認識されるため、家族の減少に対する問題意識は薄いと思われる。この意識差は摩梭人が従来最も重視してきた家の継承の行方に大きく関わり、婚姻に対する選択において重要な要素となるであろう。

以上のことから、移動先での定住が進むにつれ、これまでの婚姻形態を保つことが意識的に提唱されるようになり、アイデンティティを客観的に捉えて同民族での結び付きを強める傾向がでてきているが、理想とされる「共生」と「現実」の乖離をも認識する動きも現れ、それに対応して「文化保護活動」が活発になっている。一方、断続的に繰り返される移動の場合、婚姻形態の変化に対する認識は薄く、無意識のうちに従来の婚姻形態は形骸化していることが理解できた。しかし、「移動」と「共生」の関わりと動向に関しては、移動を繰り返す男女の子どもたちがどのような婚姻形態を選択するか注目し、今後の移動の傾向を詳細に把握する必要がある。

【資料】



調査地地図（雲南省周辺）

地図A・B出典：『摩梭族の母系社会』遠藤織枝著、勉誠出版、2002年を一部加筆

事例① 雲南省 A村 ナム 女 35歳

(2004年3月10日、2005年8月、2009年3月、2012年8月に聞き取り実施)

ナムは小学校2年で退学したが、漢語を流暢に話することができる。性格は活発で人気があり、テレビ局も何度か彼女に取材を申し入れた。彼女の家は5人家族である。母と父、2人の妹がいる。1999年に彼女を尋ねた時、彼女は20歳であったが、一人で自宅が経営する民宿の切り盛りをしていた。母は体が弱く、父は農作業をしていた。当時、次女は昆明で歌舞を勉強し、三女は地元の中学に通っていた。

ナムは2000年に四川省の漢族男性と走婚を始めた。その漢族男性は経済的に豊かであったので、男性から多額の投資をうけ、村で初めての各室シャワー・トイレ付の民宿を建てた。経営は順調で、アルバイトを雇うことが可能となったので、労働が軽減された。2001年に長男を出産し、ナムの家で育てられた。しかし長男が4歳になり幼稚園に通う年齢になると、息子の将来のためにと、走婚相手は男性の実家がある四川省の都市部に息子を持って行き、そこで高いレベルの教育を受けさせるということを決めた。ナムには民宿の経

営と家を継ぐ責任があり、息子とともに四川省の走婚相手の家に行くことができないため、息子がもう少し成長して四川省に行かせることを提案したが、受け入れられなかった。摩梭人の母系家族では、子どもは生涯母親の家で暮らすのが、漢族において息子は大切な後継ぎであるので、子どもを漢族の家に引き取りたいと考えているようだ。

2005年、次女が実家に戻ったため、ナムは家を離れることができるようになった。三女は武漢の大学に通い、将来公務員になることを目指していた。次女が地元の男性と走婚を始めたため、ナムは次男を出産した後、2009年に麗江に家を購入し、長男と次男とともに移り住んだ。移住の主な目的は子供の教育のためである。

2005年にナムの父は亡くなり、現在、落水村の家には母と次女及び次女の娘3人の5人が暮らしている。

事例② 雲南省 A村 ラム 女 38歳

(2004年3月、2005年8月、2009年3月、2012年8月に聞き取り実施)

ラムの家は3世代である。第1世代は摩梭人の父と普米族の母である。父母は同居し、一男五女が生まれた。2代目以降は各自の婚姻スタイルをもち、3世代目となる子供がいる。

2世代目は一男五女である。

長女：同村の摩梭人と走婚をしている。子どもはいない。非常に働き者でしっかりしているため、母親はすでに家長の役目を長女に譲っている。

次女：1995年、A村に商売にきていた漢族男性と走婚をした。この漢族男性は離婚歴があり、前妻との子を連れてきたが、夫の連れ子は次女と一緒に生活せず、祖母（次女の母親）と生活している。2人の間にも男子が1人生まれ、次女は漢族男性と子供と共に3人で実家が経営する民宿に泊まりこんだ。父は初め漢族男性を受け入れない排他的態度をとったため、漢族男性は何度か家を出たこともあり、一定期間は家を離れまた戻ってくることを繰り返した。この漢族男性はよく働くので、最近では父親から頼られるようになった。

長男：摩梭人女性と走婚をした。2人だけで居住し、子供は母方の家で養育されている。2人は独立して民宿を経営していたが、後に外部の企業に土地と民宿を貸し出した。

三女（ラム）：22歳で同じ村の青年と走婚をはじめ、翌年長女を産んだ。長女はラムの家で育てられたが、走婚相手の家にとって初孫だったので、頻繁に走婚相手の家が孫を迎えにきて連れて行った。その2年後に長男が生まれた。長男もラムの家で育てられた。しかし長男が3歳の時、彼女の走婚相手が急死した。彼の死はラムの家の経済や日常生活にはほ

とんど影響を及ぼしていないようだが、ラムの感情的悲しみは深く、当時はよく泣いていた。その後ずっと走婚相手はおらず、家事に従事している。長女は中学を卒業し、麗江の高校に進学した。

四女：四女は非常に活発な性格で、A村に観光にきていた漢族男性と知り合い結婚した。この漢族男性は中国東北地方の出身で、北京で広告の仕事をしていて、走婚をはじめてすぐ仕事をやめ、2人で麗江に行き喫茶店を開いた。出産を機に一度A村に戻ったが、再び麗江で家を購入し移り住んだ。2人の子どもたちも父母と一緒に麗江で暮らしている。

五女：昆明の観光専門学校に通い、ガイドになりたかったが、ガイドの免許取得試験に合格することができず、卒業後そのまま家にもどった。しばらくは他の若者同様、A村でガイドをするなど観光業に従事していた。その間、北京民族村で民族舞踊をしないかといった誘いがたくさんあり、彼女は外に出たかったが、彼女の父が強く反対し、彼女はずっと家から離れることができなかった。彼女は一度、寧蒭県から商売で瀘沽湖に来ていた漢族男性と恋愛をした。しかしその頃、婿入りした漢族男性が父の漢族に対する排他的態度に反感をもち、家族内での矛盾がおこっていた。彼女の父は漢族男性との婚姻に強く反対し、婚姻はかなわなかった。当時、A村に彼女に好意を持つ摩梭人男性がいたが、彼女は「彼のことは嫌いではないけど、恋愛対象として考えられない」と言っていた。最終的には彼の家族が彼女の家に贈り物をもって走婚の申し込みに来た。彼女の父と母は喜んで、彼女にこの摩梭男性と走婚するように勧めた。彼女は彼を嫌いではなかったもので、走婚をすることにした。しかしその走婚は1年ももたなかった。彼女は別れた理由について、「彼とは結局共通の話題がなかった」と言った。都会での生活を経験した彼女と村を離れたことがない彼とでは価値観が異なり、話が合わないということのようだった。

その後、彼女はしばらく家の手伝いやA村で観光業の手伝いを続けたが、2005年に地元の旅行管理会社に就職した。麗江で実習をした後、A村に戻って瀘沽湖観光開発に取り組んでいる。職場で知り合った納西族男性と結婚し、男性が彼女の家に同居するようになった。長男が生まれ、昨年から小学校に通うようになったため、四女の麗江の家に預け、麗江の小学校に通わせている。

事例③ 雲南省 A村 ラツォ 女 35歳

(2004年3月10日、2005年8月、2009年3月、2012年8月に聞き取り実施)

ラツォの実家はA村で旅館を経営している。一代目はラツォの父方の祖母で、現在84歳

である。信仰心が厚く、毎朝ラマ堆⁸に行き、礼拝をすることが日課である。以前は昼間旅館の手伝い（主に湖畔で野菜や魚を洗う、家畜に餌を与える）をしていたが、現在は年老いたため、家長の役目を長女に譲った。

2代目はラツォの父（三男）と父の妹、父の兄2人、弟3人の7人である。

ラツォの父（ザジェアチャ）、56歳。1年前までは村長をしていたが、体調不良と漢民族との対立を理由に辞職し、現在では旅館の仕入れや改築などの仕事を手伝う。彼は走婚しており、相手は落水上村の普米族で、その関係は安定している。子供は3人おり、ラツォは父方で育てられ、弟と妹は母方で育てられた。

ラツォ父の妹（オバ）、53歳。家長を務める。彼女は旅館の経営、掃除、洗濯、食事の準備をしている。彼女も走婚をしている。走婚相手はA村の普米族で、ラツォの母の弟でもある。走婚関係は安定しており、彼は夜になると彼女の家の母屋に座って、客と雑談をしたり、茶や酒を飲んだりしている。彼には特に決まった仕事はないが、3人の子供はよく父になついている。

父の兄2人と弟3人。長男（兄）は寧蒗の工場で働き、漢民族女性と婚姻したが、退職して家に戻ってきた。次男（兄）はA村にいる走婚相手の家に住んでいる。四男、五男（弟たち）は麗江で公務員をしており、摩梭女性と結婚後、麗江で配偶者と同居している。六男は足が不自由であるが、家畜の世話と柴刈りをきちんとかなしている。六男には走婚相手はいない。

3代目はラツォたちの代である。ラツォの父の兄たちがみな外地で子供を持ったため、ラツォがこの家で生まれた初めての子供であった。そこで、村では珍しいケースであるが、父の家で育てられた。しかし、父と同居していても彼女は母方の血縁を引くべきだと考えられるので、彼女はこの家の継承者ではないとみなされている。母は普米族で、父は摩梭人なので、両言語ができ、父のことは「阿普（アプ）」つまり普米語で「父」と呼ぶ。父と母の家が近いので、両方の家を頻繁に行き来している。1999年から昆明の大学に通った彼女は、卒業後麗江で就職し、2005年に回族男性と結婚し、一女をもうけ、麗江に居住している。長女は父方の姓を名乗っている。

ガサンチンジュ、30歳。ラツォの父の妹（父方オバ）の長女。2000年夏から北京の高校に通う。母系家族の習慣では、後継ぎになる存在であるが、彼女は外へ出たがっており、

⁸ 「マニ堆」とは円錐状に白い石を積み重ねて作ったもので、高さおよそ2~3m、円周はおよそ5~6mである。その周りを一周まわると、経を1回読むのと同じことになるという。

母の反対を説得して、北京に出ることになった。武漢の大学に進学し、卒業後は麗江にある大学の職員として働き、2012年に麗江で公務員をしているA村出身の男性と結婚した。

ヨンジュ、ガサンチンジュの妹、28歳。家の手伝いをしている。姉が進学したので、彼女は次女ではあるが後継者になった。

ザシ（ガサンチンジュの弟）。17歳だが、ザシは麗江で高校に進学し、昆明の大学に行ったが、退学し自宅の民宿を手伝い、観光業に従事している。

事例④ 雲南省 A村 アカ・ダマ家

(2004年3月10日、2005年8月に聞き取り実施)

3世代同居で、6人家族である。現在、旅館を経営して生計をたてている。

1代目はアカ・ダマの母と父である。かつて母と父は走婚をしていた。その頃父は外にでて商売をすることが多く、父の留守中には多くの男が母の家を訪ねてきたそうである。しかし、母はアカ・ダマの父のこののみが好きだったので、他の男達は家に入れなかった。母は体が弱かったため、多くの男が彼女を訪ねてくることにかえって恐怖心を抱いていたという。その後アカ・ダマの祖母（母方）が亡くなり心細くなったことと、アカ・ダマの父も外に出ることが少なくなったため、父が母の家に来て同居をするようになった。

2代目はアカ・ダマと弟2人である。アカ・ダマは3年前に、村の同世代の男女数人グループで北京の民族村にアルバイトにいった時、その中の同じ村の男性と交際をはじめ、村に帰ってきてから、走婚を始めた。

次男は現在ラマ僧で、インドに修行に行っている。一番下の弟は家におり、観光客への船こぎや、馬引き、民族舞踊会の仕事をしている。

3代目はアカ・ダマの息子2歳。アカ・ダマの家で育てられている。

事例⑤雲南省 B村 ドジマ 女 50歳

(2004年3月10日、2005年8月、2009年3月、2012年8月、2013年7月に聞き取り実施)

ドジマの家は父、それとドジマを含めた6人の姉妹のうち、三女と五女以外の4人、子供たち12人を合わせた17人家族であると認識されているが、常に家にいる者は7人ほどである。6姉妹はそれぞれの走婚相手の事情によってその走婚の形態が異なっている。

かつて父と母は同居していたが、2005年に母が亡くなった。父はかつてリンゴ栽培と農業をしていたが、占いをすることができ、信仰心の篤い人物である。

2 世代目は 6 人の姉妹である。

長女 56 歳：6 人姉妹の母親はみな同じだが、長女だけ父親が違う。長女の父親は感電死したそうだ。彼女の走婚の関係はとても安定しており、実家から歩いて 2、3 分のところにある走婚相手の家で同居している。走婚相手は同じ村に住むチベット族で、とても温厚で働きものである。彼女たちの間には娘が 2 人、息子が 2 人の子供がいる。一番下の息子は今年 15 歳で中学 3 年であるが、計画出産の枠を超えての出産であったため、1,950 元の罰金を支払った。走婚相手は父親の代に中甸⁹から永寧に移ってきたが、彼以外の家族はみな早く亡くなったため、彼は 1 人で暮らしてきた。そのため長女は子どもと一緒に彼の家で暮らした。この家族は経済も一家族で運営しており、一見父系家族のように見えるが、長女の姓は彼女の生家のままで子供たちも母方の姓を名乗っており、摩梭人の家族観からいうと、長女は生家の成員であり、嫁入りしたとはみなされていない。

次女（ドジマ）50 歳：彼女はこの村で初めて中学を卒業した女性で、村中では学歴のある人とみなされている。以前、彼女は婦女主任という役を務めていた。彼女は 21 歳の時、地元の有力者と付き合い、22 歳の時に息子を 1 人産んだ。しかしその有力者にはすでに妻がおり、子供がいた。周囲の人間は、妻も走婚相手もいると、彼の仕事に影響が出ると忠告し、ドジマと付き合うことに反対した。彼女はその忠告を受け入れ、子供とともに実家に戻り、その後長い間走婚はしなかったが、31 歳の時アルチャという男性と走婚をし、33 歳のとき息子をもうけた。アルチャにも前の走婚相手との間に息子がいるが、息子は母方で暮らしている。ドジマとアルチャが走婚を始めた後、アルチャの家が火事で家を焼失し、その後立て続けに母、兄が亡くなるという不幸にみまわれ、費用もかかった。ドジマはその時彼を精神的にも金銭的にも助けたという。ドジマは現在、アルチャと息子 2 人の 4 人で同居している。ドジマは 3 年前から機織物をつくり、それを観光客に売ることによって収入を得ている。平均して月に 1,000 元前後の収入があり、その収入は彼女とアルチャと 2 人の息子の生活費に当てられる。残ったお金は貯蓄し、彼女の実家で現金が必要なときに使っている。ドジマはアルチャと息子 2 人と同居していても、生家から分家してはおらず、生活の場が生家と異なるだけと考えている。2 人の息子はドジマの母方の生家に属し、アルチャは彼の生家の一員で、オジの立場として彼の姉の娘の面倒をみている。

三女 47 歳：彼女は以前ミャンマーに出稼ぎに行ったときに、漢族男性と知り合い、娘を 1 人産んだ。その後ミャンマーの内戦の影響で、ミャンマーで出稼ぎを続けられなくなり 3

⁹中甸は麗江の北方にあたり、チベット族が多く住む。現在はシャングリラ県に改名している。

人で中国に帰国した。この漢族男性は山東省の農村出身で、幼いころ母を亡くしたため高校卒業後、各地を転々とまわって出稼ぎをしていた。彼は誠実な性格で彼女に対してやさしいという。父は漢族でしかも実家が遠い彼との婚姻を反対したが、彼女は「彼と別れたら二度とこのようないい人にめぐりあうことはできない」と父を説得した。父も彼女の話聞いてそれ以上は反対しなかった。ミャンマーから帰ってきてからは漢族男性の実家のある山東省で農業をすることにしたが、山東での生活はまだ不安定だったため、ミャンマーで産まれた長女はドジマに預けられた。摩梭人の母系家族では、子供たちはみな母方の家で平等に育てられるため、三女の娘も母親がいないという寂しさは感じておらず、ドジマのことも母と呼んでいた。その後、山東で息子を出産し、生活も安定したので、三女は娘が小学校に入学する年に山東に連れて行った。しかし、2004年3月に彼女の家で宿泊した際、三女は母の看病をするために長女をつれて実家にもどってきており、すでに半年ほど経っていた。現在、中国では少数民族優遇政策が実施されており、少数民族は大学受験、計画出産、就職などの面で優遇されるため、彼女の2人の子供の戸籍は彼女の実家に置き、子供たちは摩梭人で戸籍登録している。2009年、三女はドジマが指導して作っている織物を販売する店に駐在するようになり、夫も山東から移り住み、夫と子供2人の4人で暮らしている。

四女：別居や出稼ぎなどで日頃家にいない姉妹が多いなか、彼女だけが家をずっと離れずに暮らしている。彼女の1人目のアチュは同じ村に住む彝族男性で、彼との間に一男一女をもうけた。しかし彼は不誠実であったため、彼女は彼と別れたいと申し出た。しかし彼は同意せず、彝族の友人に頼んで彼女の家を脅したので、彼女の家はこわくなり、3,000元を彼に支払い別れてもらった。その後2人目の走婚相手が見つかった。2人目の走婚相手は隣村の摩梭人で、2000年に男子が生まれ、彼女の家で育てられている。2人目の走婚相手は兄弟が多いので、男兄弟がいない彼女の家で頻りにきて労働を手伝ったり、子どもの世話をしたりしており、関係も安定している。

五女 43歳：隣村の摩梭人と走婚をして一男一女がいる。彼女の走婚相手は姉妹がおらず、女手が不足していたため、姉妹の多い彼女が彼の家の手伝いに行っていた。そのうち彼女は子どもをつれて走婚相手の家に住むようになった。

六女 40歳：中学卒業の学歴をもち、漢語ができる。以前彼女は三女を頼ってミャンマーにアルバイトに行ったが、実家に戻り、21歳のときに走婚をして男子を生んで実家で育てた。子供が生まれてから彼女の走婚相手は彼女のところに通ってこなくなり、走婚関係

は解消された。その後、彼女は息子を実家に置き、機会があれば出稼ぎに出ている。27歳のときに2人目の子供が生まれたが、その子の父親も子供が生まれると通ってこなくなった。彼女の走婚は安定していない。

3代目は長女、次女（ドジマ）、四女、六女の子どもたちである。

長女には二男二女の子どもがいる。一番上の娘は画家であるチベット族男性と走婚し、一人息子がいる。次男は中学卒業後、叔母のいる山東で調理師の勉強をし、卒業後麗江などのレストランで働いた。ペー族の女性を結婚し、子供が1人生まれたが、レストラン経営は難しく、ペー族女性の地元大理でとれる農作物を仕入れて自ら販売するといった移動性の高い仕事をしているので、家にはいない。次女は麗江の織物店で手伝いをしている。漢族男性と結婚し、子供が一人いる。次男は中国全土を移動しながら出稼ぎをしている。

次女（ドジマ）の2人の息子は、長男は昆明の大学を卒業後、母の仕事の手伝いしている。ボランティアで知り合った台湾女性と結婚し、台湾で子どもを出産しようとしている。次男は地元の中学に通っている。

四女の3人の子どもは、長女は地元で服飾店を開き、月々2000元ほどの収入がある。金鉱で働く男性と走婚をしており、2013年に子供が生まれた。長男は山東で理容師をしている。次男は地元の中学に通っており、麗江の高校に進学を希望している。

六女の3人の子どもは母方の家に暮らしており、長男は中学、次男、長女は小学校に通っている。

【参照文献】

（中国語文献）

和鐘華

2000 『生存和文化的選択—摩梭母系制及其現代変遷』雲南教育出版社。

拉木・古薩

2009 『格庄— 一個摩梭村落の生存記録』雲南人民出版社。

馬繼典

2006 『瀘沽湖摩梭母系文化風情実録』雲南人民出版社。

寧蒗彝族自治州志編纂委員会

1993 『寧蒗彝族自治州志』雲南民族出版社。

宋兆麟・嚴汝嫻

1983 『永寧納西族母系制』雲南人民出版社。

楊建国

2009 『藏着的摩梭史—母系家園最後の浪漫玫瑰』雲南人民出版社。

楊麗芳

2009 『受傷的沈黙者—一個摩梭女人眼中的文化研究現象』雲南人民出版社。

周華山

2001 『無父無夫の国度？重女不輕男的母系摩梭』光明日報出版社。

(日本語文献)

遠藤織枝

2002 『中国雲南 摩梭族の母系社会』勉誠出版。

王孝廉

2004 「伝統文化の持続と変容—瀘沽湖の生態・観光・社会の調和と発展について」『雲南の「西部大開発」』 p163-192、九州大学出版会。

金縄初美

2002 「母系社会における民族意識の変容」アジア太平洋センター『アジア太平洋研究』 11:51-58.

金縄初美

2012a 「雲南省・瀘沽湖における観光化と民族意識の相互作用」北九州市立大学『外国語学部紀要』 131:23-59.

金縄初美

2012b 「中国雲南省モソ人の文化保存とアイデンティティ」公益財団法人国際東アジア研究センター『東アジアへの視点』 23 (3) : 18-31.

(ウェブページ)

麗江市瀘沽湖摩梭文化研究会ホームページ www.mosuo.org.cn

(2016年1月4日原稿掲載承認)